

# NO FENCE



vol. 45 2017年9月

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203

[nofencekorea@gmail.com](mailto:nofencekorea@gmail.com)

<http://nofence.jp/>

## INDEX

ルワンダのジェノサイドと北朝鮮（小川晴久） 2

資料 趙明熙と『満州パルチザンたち』（小川晴久） 6

書籍紹介『自由を盗んだ少年』（木村 亮） 8

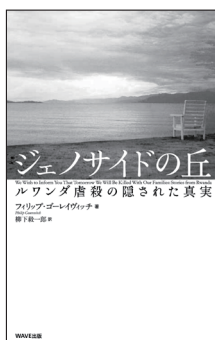
## 急に涼しくなりました。

体調を崩さぬようお気をつけください。

今後の集会などについては、鋭意準備中です。



## 読書の秋に……



**ジェノサイドの丘**  
ルワンダ虐殺の隠された真実

フィリップ・ゴレイヴィッチ／著  
柳下毅一郎／訳

新装版

WAVE 出版

2300円（税別）



**自由を盗んだ少年**  
北朝鮮悪童日記

金革／著  
金善和／訳

太田出版

1400円（税別）

---

# ルワンダのジェノサイドと北朝鮮

——『ジェノサイドの丘』を読んで考えたこと——

代表 小川晴久

---

ジェノサイドとは集団殺戮のこと。ヒットラーのユダヤ人殺戮が有名。600万人が犠牲。

この数には及ばないが、第二次世界大戦後、2つめのジェノサイドが1994年4月から7月にかけて集中的におこなわれた。アフリカの小国ルワンダでの、フツ族によるツチ族に対しておこなわれた殺戮。人口750万のうち80万から100万の人が殺戮された。ルワンダのジェノサイドである。

アフリカの地図を見ていただきたい。中西部にある。ルアンダ (Luanda) とは違う。こちらはアフリカ西海岸に面している都市の名前でアンゴラ共和国の首都である。ルワンダ (Rwanda) は国名であり、その首都はキガリである。



私がルワンダの虐殺を知ったのは、2005年秋に国連で「保護する責任」という新しいドクトリン（原則）ができた時である。2000年4月コフィー・アナン国連事務総長はミレニアム演説の中で、ルワンダの虐殺やユーゴスラビアの紛争を例に挙げて、世界はどう対処したらよいかを訴えた。この訴えに答えてカナダ外務省を中心に「保護する責任」委員会ができ、5年後にそのドクトリンができたのである。

私は「保護する責任」原則のほうに関心を集中し、北朝鮮の人権改善にどうこの原則を活用するかに努め、ルワンダのジェノサイドのことは調べないままにきた。最近、友人の三浦小太郎氏がフィリップ・ゴーレイヴィッチ著『ジェノサイドの丘——ルワンダ虐殺の隠された真実』という本の紹介をした一文を読んだ。私は新装版 (WAVE 出版, 2011年) を購入し、読んでみた。

著者は、祖父母、父母がナチの迫害を逃れアメリカに亡命した、若いアメリカのジャーナリスト。1995年5月から9カ月ルワンダに入り、被害者や関係者に執拗なインタビューをし、1年前の虐殺を再現してみせた。内容からして一気に読める本ではない。1週間くらいかけ、2回読み返してメモを取り、全貌をつかむことができた。初めにその要旨を書き、考えたことを4点にまとめてみる。

## 本書の要旨

ルワンダの先住民はピグミー（今は人口の1%）であったが、その後フツ族が南と西からやってきたバントゥー族に属し、ツチ族は北と東からやってきたナイロート族に属する部族とされ、入ってくる。フツ族は農業、ツチ族は牧畜。容貌は「フツ族はずんぐりして丸顔、肌が黒く、鼻が平らで、唇が厚く、顎が四角いとされる。ツチ族は痩せ型で顔が長く、さほど色黒でなく、鼻が細く、唇が薄く、顎が尖っている」（59 ページ）。

時が経つにつれ同じ言葉を使い、同じ宗教を奉じ、混住社会をつくり、両族は婚姻や養子縁組で同じ家庭をつくったりし、共生した。しかし牧畜と農業では経済格差があり、ツチ族という言葉は、政治的経済的エリートの代名詞になっていった。1860年、ツチ族のムワミ（首長のこと）ルワブギリがルワンダの王位につき、軍事的政治的遠征をくり返して現在とほぼ同じ版図を築いた。封建時代、ツチ族は貴族であり、フツ族は被支配民であった。

第一次世界大戦後、国際連盟は戦利品であったルワンダをベルギーに与え、ベルギーはドイツがやっていた「二重植民地制」を引き継いだ。ツチ族エリートがベルギーの保護と許可を得て、内部闘争とフツ族への支配を続ける。1931年、ベルギーと教会は自立心の強い王を廃位させ、従順な人物を王位につける。新王はムワミの聖性を放棄し、カトリックに改宗したので、ルワンダはアフリカのカトリック化された国になる（現在人口の65%がカトリック、15%がプロテスタント）。

1933年から1934年にかけて人口調査をおこない、フツ族85%、ツチ族14%、トゥワ族1%に分類し、「人種」IDカードを発行し、「ベルギー人はツチ族優越神話に根ざした人種差別機構を完成させた」（68 ページ）。「ベルギー人は『人種』をルワンダ人の存在における決定的特徴に変えてしまった」（69 ページ）。

1959年11月、フツ族の副首長がツチ族の活動家に襲われ、フツ族集団がツチ族の政府機関を襲い、家を焼く暴動が始まり、フツ族は組織をつくりツチ族に対する略奪、放火、散発的殺害が全土に広がる。事態収拾に入ったベルギー軍大佐ロジストは、逆に暴動を支持し、1961年君主制は破棄され、1962年ルワンダは完全に独立し、フツ族が権力を掌握した。

フツ至上主義者たちの扇動で、ツチ族に対する復讐が始まり、特に1991年からツチ族皆殺しの殺戮が始まる。1994年4月6日フツ族の大統領が飛行機墜落事故で死ぬや（フツ族軍部の仕業）、フツ族によるツチ族ジェノサイドは3カ月半にわたって敢行され、80万～100万のツチ族が殺された。

国連は国連軍を派遣するが、当初の5千人は4月21日安保理で即座に9割も

削減されて 270 人に（アメリカの主導で）、フランス軍はフツ族のジェノサイドを軍事面で支援するという大きな誤りを犯した。1991 年から始まった旧ユーゴスラビアの紛争に国連は 6 万の軍と数十億ドルを費やし、ルワンダを見捨てたのである。以上が本書の要旨である。

## 1 当時ルワンダの事態に無知であったこと

1989 年のベルリンの壁の崩壊から 1991 年のソ連邦の崩壊に世界の目は釘づけになったのは当然である。1991 年からユーゴスラビアの解体が始まり、以後 10 年間いくつもの紛争がユーゴで続いた。世界の目は、マスコミの報道はそちらが主体になったのもやむをえない。

1994 年 4 月からの 3 カ月半ルワンダでジェノサイドが進行している時、日本では「北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会」が 2 月 20 日に発足し、私はその活動に邁進していた。マスコミが報道しない以上、わかりようがなかったと言える。ただ私の中ではアフリカ軽視、黒人軽視が厳然としてあったことは事実である。

今回本書を読んでみて、被害者のツチ族の人たちの発言、彼らを助けたフツ族良心派の発言、ツチ族の政権の担当者たちの発言に私は目を見張り、感嘆させられたところが何カ所もあった。たいへん遅ればせながら、翻訳を通じてであるが、今回ルワンダの歴史やジェノサイドを克明に学ぶことができたのは幸いである。

バートランド・ラッセルは流石である。1994 年当時のルワンダの状況を「ナチスによるユダヤ人抹殺以来、我々が目撃するもっとも恐ろしく組織的な虐殺」であると見ていたという（80 ページ）。アフリカに植民地を持ち、アフリカに近いイギリス人であったこともある。

北朝鮮に恐ろしい強制収容所が存在することを私が知ったのは 1993 年 8 月 22 日から 1994 年 2 月。2 月 15 日に文藝春秋から強制収容所体験者の手記『北朝鮮脱出』上下の翻訳が出た。恐ろしい強制収容所ができたのは 1972 ～ 73 年頃と言われるから、20 年もその存在に気づいていなかったことになる。われわれはその時からこの収容所の存在と実態を知らせる運動を続けている。

## 2 西側や国連の罪

ルワンダのジェノサイドに関しては、上記の要約に示したように、西側や国連は罪を犯した。後に国務長官になったあの女性のマデリーン・オルブライトは当時アメリカの国連大使であった。ナチの迫害からアメリカに逃れてきたチェコ難民「ミュンヘンの娘」である彼女が、ルワンダへの国連軍派遣に反対したことは、彼女の政治歴の最大の汚点であると本書の筆者は言う（100 ページ）。

もう一人見逃せないのは、この直後国連の事務総長になるガーナ人コフィー・アナンである。ルワンダに派遣された国連軍（PKO）の隊長ダレール少将が1994年1月11日過ぎニューヨークの国連本部平和維持活動本部に緊急のFAXを送った。「情報提供者保護の願い」と題されたFAXで、そこには首都キガリ在住のツチ族をリストアップしていることが進行し、ツチ族絶滅作戦が進んでいること、フツ族の武器庫の所在も教えるという情報提供者がいるので、その保護を許可してほしいという趣旨のFAXである。しかし当時国連平和維持活動の責任者であったアナンは、それを拒絶するFAXを送った。「やめとけ」と。情報提供者の保護も国連軍の任務を超えるという理由であった。実際3カ月後にそれは現実となった。アナンは事務総長になってからこの問題に対する喚問に一切応じていず、証言も拒否している。アナンの判断ミスであり、大きな汚点である（136ページ）。

北朝鮮の人権侵害に対しては、国連人権委員会は1997年の第1回決議以後毎年それを続け、人権理事会に改名後、2014年に立派な北朝鮮人権状況調査委員会報告書(COI報告)を出している。北朝鮮の問題では最大限の努力を国連はしている。

### 3 フツ族全体主義の様相

本書を読んでいて、北朝鮮の全体主義＝唯一思想体系を連想させる箇所が2カ所あった。引用する。

「1994年のルワンダを、外の世界は崩壊国家がひきおこす混乱と無政府状態の典型と見なしていた。事実は、ジェノサイドは秩序と独裁、数十年におよぶ現代的な政治の理論化と教化、そして歴史的にも稀なほど厳密な管理社会の産物だったのだ。」（122ページ）

「マフィアのような犯罪組織では、ギャングの論理と実利にしたがう人間は組織の所有物と見なされる。同じ考え方がルワンダの伝統的な社会、政治、経済構造にも存在している。」（96ページ）

北朝鮮の全体主義＝唯一思想体系の世界は、金日成の悪口を言うことは強制収容所送り＝死を意味する。国家保衛部が支配する恐怖社会では、役人たちはヤクザのように振る舞うのを日常茶飯とする。労働者の組織よりも、軍の組織が先行する（先軍政治）。上に引用したようなマフィアのような犯罪組織と言ってよい。その支配体制の手足となって働く要員は、実利と生命を得ている。北朝鮮社会の成員も、自分や家族の生命を守るためにそれに従っている。1967年（唯一思想体系の承認）以来の「数十年」におよぶ訓練の中で、今日のような体制ができている。

## 4 知る努力, 知らせる努力

去る7月に、北朝鮮の地方組織の幹部の一家4人が脱北し、中国政府に捕まって、北朝鮮に送られる直前、持参していた青酸カリを飲んで全員（父親、息子、娘2人）が自殺したという報道が伝えられた。実に痛ましいニュースであった。自殺の原因は、強制収容所に送られ、全員が殺されるようなひどい扱いを受けることへの恐怖にあったと私は考えている。強制収容所の存在の残忍さである。北朝鮮社会全体を恐怖に陥れているのは、山の中にある集団農場に擬装した5つ6つの恐ろしい強制収容所である。

3代目金正恩政権のアキレス腱は強制収容所である。その存在と実態が外の世界、国際社会に知られたら、金日成の威信に傷がつくだけでなく、国際的にすごい批判を浴びるからである。強制収容所の存在と実態は、体験者の手記やわれわれの活動、COI報告で、かなり知られてはきているが、日本国内全体で考えると、まだまだ知られていない。

2006年に議員立法で日本版北朝鮮人権法ができた。北朝鮮の人権侵害の実態を公共団体は広く国民に知らせる必要があり、その努力を求めた法律である。公共放送であるNHKは、ニュース特集で北朝鮮の恐ろしい強制収容所を知らせるべきである。NHKは10年以上もそれを怠り、この法律を実践していない。

私たちNGOは強制収容所の体験者の手記を、一人でも多く、新しい人に読んでもらう活動を実践すべきである。知る努力、知らせる努力である。本書『ジェノサイドの丘』を読んで、強くそれを思うのである。

---

### 資料 趙明熙と『満州パルチザンたち』

代表 小川晴久

---

最近友人の佐古忠八さんが貴重な情報を送ってくださった。2000年4月25日の東亜日報の記事である。参考資料として以下に訳出してご紹介する。

\*

#### 趙明熙先生処刑理由は小説“満州パルチザン”のため

1928年ソ連へ亡命し極東で独立運動をした文人趙明熙先生が、1938年ソ連秘密警察に逮捕され、4年後処刑された理由は、大河遺作小説“満州パルチザン”の

ためであると遺族たちが主張した。

長男ミハイル（韓国名：趙ソンイン 67歳）、次男バルダ（65歳）ら遺家族は、24日父が逮捕される当時金日成（ママ）部隊など1920年～30年代満州とシベリアで活動していた抗日パルチザンを素材にした“満州パルチザン”の草稿を書き終える状態であり、この小説がソ連当局を刺激し、死に至ったと公開した。

ミハイルは1991年旧ソ連国家保安委員会（KGB）の父処刑記録を照会した結果、逮捕当時父が公開された場所であるハバロフスク作家同盟の建物で宿泊しつつ“満州パルチザン”を執筆していて、この小説を書くように勧めてそれを助けたカン・ジンテとそれをロシア語に翻訳した金アパナシが同じ事件で処刑され、罪名が“民族主義者”であったと明らかにされた。

当時スターリン政権は民族主義をソ連邦に対する最大の敵と数えていて、先生が韓人抗日運動を素材にした小説を書いたことが、民族主義を鼓吹するものと判断された可能性が大きいこと。

遺家族は“1950年代末北朝鮮の作家李箕永がソ連を訪問したとき、金日成もこの小説の行方に関心を持っていた”こと、“金日成は小説の公開によって自分が美化した抗日闘争の真相が明らかになることを望んでいなかった”と伝えた。

今まではソ連当局が極東の韓人の中央アジア強制移住を前にその反発を防ぐため、民族指導者であった先生を除去したという説が有力だった。

先生はスターリンの死後である1956年に復権し、1960年代彼の選集がハンデルとロシア語で出たが、“満州パルチザン”に対してはアレクサンドウル・ストゥリンなど一部の研究者が作品の存在の事実だけ指摘していた。

遺族たちは当時押収された草稿はKGBの後身である連邦保安部（FSB）文書保管所に保管されているだろうとし、その返還を要請する考えであると語った。“満州パルチザン”の草稿が発見されれば、文学史だけでなく、当時の独立運動史研究にも大きな助けになるものと思われる。（モスクワ＝金ギヒョン特派員）

＊

訳者注——金日成の「革命伝統」への強力な反証の一つである。詩人趙明熙の詩は金素雲訳編『朝鮮詩集』（岩波文庫）に2篇訳出されている。

---

## 書籍紹介 『自由を盗んだ少年』

事務局長 木村 亮

---

金革著，金善和訳『自由を盗んだ少年——北朝鮮悪童日記』太田出版，2017年  
本書の著者・キムヒョク金革氏は，1982年チヨンジン清津市生まれの脱北者。2001年，19歳の時に，モンゴル経由で韓国入りに成功した。韓国では，様々な仕事で苦労した後，24歳で一念発起して大学に入学。その後も大学院に進んで研究を続け，35歳になった今年，博士課程を修了したようである。

本書では，そんな金革氏が自身の生い立ちをふりかえって，コッチェビ（ストリート・チルドレン）として生き抜いた日々や，中国との密輸がばれて投獄されたチヨンゴ全巨里教化所の地獄，そして命がけの脱北の過程を綴り，現在の心境をも語っている。

なかでもユニークに感じたのは，コッチェビの暮らしが具体的に描かれているところ。ひたたくりやスリの手口，チヨンリヨンバ青龍派というコッチェビ組織のことなど，当事者でなければ知りえないことが語られている。金革氏の10歳代は大飢饉の時期と重なっており，生きるために盗まねばならない極限状況が行間から伝わってくる。とはいえ，その筆致は陰惨ではなく，むしろ生き生きとしている。なお，コッチェビは大学院での金革氏の研究テーマであり，修士論文「北朝鮮のコッチェビ研究」の日本語訳を太田出版のウェブサイトで見ることができる。

金革氏は16歳の時に，中朝国境をたびたび越えて密輸で稼ぎ，生計を立てるようになった。ところが，ある裏切りによって密輸を告発され，激しい拷問の末に全巨里教化所に収容されることになる。教化所の囚人が置かれている状況については，すでに知られているところではあるが，本書からもあらためてその非人道性を実感させられる。

脱北後，韓国で暮らしはじめた金革氏は，自分は「赤」（北朝鮮人）でもなく「青」（韓国人）にもなれず，いったい何色なのか？ と苦しんだようである。しかし，悩んだ末に次の結論に至っている。

「結局ぼくの結論はこうだ。赤か青のどちらかでなければならぬわけじゃない。腹を満たすことができ，誰にも束縛されない生活ができるのなら，何色でも関係ないじゃないか？」（177ページ）

個人の生存と自由という基本的人権は普遍的であり，共同体の歴史や共通目標よりも価値の高いものだということを，北朝鮮に生まれ育った当事者が実感を込めて語った，このうえなく貴重な言葉だと思う。